



熱心に耳を傾ける参加者。メモをとる姿も多くありました

病期の進行とともに狭くなる「治療の窓」



脳深部刺激療法(DBS)



効果を発揮するのは、どんな症状？

- ・ウェアリングオフが出現している
- ・重度のジスキネジアがある
- ・手足に強い震えがある

正しい情報を理解し、適切な時期に適切な治療を受ける

パーキンソン病は、適切な治療を適切な時期に受けることで、健康寿命が長くなり、活動が低下し、ますます引きこもりに最適なタイミングで受けることで健康な状態を長く保つことができます。調子を整え、適切な治療を受けることが大切です。調子を整え、適切な治療を受けることが大切です。調子を整え、適切な治療を受けることが大切です。

新しい情報も登場

新しい治療法も登場

注目が高まる手術による「脳深部刺激療法」

新しい治療法も登場しています。その一つが経腸療法。胃に穴をあけてチューブを挿入し、持続的に薬液を流す方法（持続注入ポンプを用いた経腸投与方法）です。ただ、装置を常に持ち歩かなくてはなりませんし、手術が可能な人は非常に少ないです。薬が効いている時（オン）と効いていない時（オフ）の差が激しい、ジスキネジアがある、オンオフはなけれど手電極を植込み、電気信号を送り込むことで脳の異常活動を制御する治療で、DBSを検討します。

初期はドパミンを増やす薬物療法で治療効果は波があります

服薬が主な治療法です。初期には脳意と関係なく勝手に手や足、唇など内ドパミンを増やす薬で、症状が改善してしまふジスキネジアも出るよ善します。しかし、長期にわたって服用になります。

ふるえなどの症状がでる病気

診断はMRIやドパミン量の検査をします

パーキンソン病は、脳内のドパミンという物質の減少が原因で、手の震えや動きの緩慢、すくみ足などの症状が起る病気です。症状は片側から発症するのの特徴で、進行すると、体が傾く側、首が下がるなどの体幹症状、幻覚、幻聴、うつなどの精神症状、認知機能の低下なども起り、寝たきりの状態に至るものも珍しくありません。一部遺伝的要因もわかっています。一般的に10万人当たり100〜150人、およそ1000人に1人に発症する手法も登場しています。

新しい治療法も登場

注目が高まる手術による「脳深部刺激療法」

パーキンソン病治療の選択肢は増加

手術療法は時期を的確にとらえて検討を



福岡大学病院 脳神経外科 講師 講演 森下登史先生



産業医科大学病院 認知症センター センター長 座長 魚住武則先生

自分らしくよりよい生活を送るために、知っておくべきパーキンソン病の治療 —薬物治療と新たな治療法

2月25日、福岡で「パーキンソン病 患者さんと家族のための公開講座」(共催/日本メドトロニック、サンケイリビング新聞社)が開かれました。専門医が最新の情報を講演。Q & Aの時間には、患者さんの質問に丁寧に答えてくれました。その一部を紹介します。

講演・森下登史先生



専門医の具体的な回答は、患者さんや家族を勇気づけました

Q&A 患者さんの質問に、2人の先生が答えてくれました

Q 発症して5年、進行も早くなってきました。これから先、心がけることは？

魚住先生 5年という薬の効果が下がってくる時期。その状態に合った薬を調整しなくてはなりません。主治医とよく話し合ってください。一般的にはスポーツをしたり、明るく活動的な生活をしているの方が、進行が遅いようです。気持ちや考え方の持ち方も大きいと思います。

森下先生 症状に応じてリハビリを取り入れたり、DBSも選択肢の一つと考えていいかもしれません。

Q 幻覚、幻聴は手術で軽減できるのでしょうか？

森下先生 胃ろうを作る経腸療法にせよ、DBSにせよ、基本的には運動症状を抑える方法です。認知症や幻聴、幻覚、排尿症状などには効果は見られません。早めにご対応するか、医師に相談しましょう。

Q 日常生活の過ごし方と、手術後の注意点を教えてください。

魚住先生 パーキンソン病は全身病といわれるくらい、多岐にわたる症状が出ます。そういう病気だということを、まず理解してください。

森下先生 DBSの目的は自分で出来ることの幅を増やすことですから、手術後にはいけないことや注意することは特にありません。

Q パーキンソン病と診断されてどう向き合っていたらいいか悩んでいます。

魚住先生 外来で、突然診断されれば驚くことでしょう。パーキンソン病は根治出来ませんが、治療すれば症状が落ち着くのは確かです。患者友の会などの交流も勧めます。

森下先生 治療の成功には薬、リハビリ、手術のすべてを組み合わせることがとても大切です。それをよく理解して、治療を進めましょう。